OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本語の表現についての研究 : 韓国語の表現と対照しながら
Author(s)	鄭, 秀賢
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42847
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏名	鄭（ちょん）　秀賢（す ひょん）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第　15682　号
学位授与年月日	平成12年8月7日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	現代日本語の表現についての研究 —韓国語の表現と対照しながら—
論文審査委員	（主査） 教授　前田　富祺 （副査） 教授　真田　信治　　助教授　金水　敏

論文内容の要旨

本論文は現代日本語の表現について韓国語の表現と対照しながら考察し、現代日本語の表現の特色を明らかにしようとするものである。本論文の内容は、まず「はじめに」として研究の目的と方法についてふれ、以下、第2章から第8章までは日本語らしい特徴が現れていると思われる表現について韓国語の表現と対照しながら考察し、「おわりに」において全体をまとめるという構成になっている。400字詰原稿用紙にしておよそ420枚ほどからなる。

第2章の「受身表現」では、日本語における受身的発想と視点の問題、受身とアスペクトとの関係、受身と使役表現との関係、受身と主語との関係などについて、それぞれ韓国語の受身表現と対照しながら日本語の表現の特徴を明らかにする。韓国語の受身表現は日本語よりも多様な形をとる。また、韓国語では自動詞を受身にすることができないこと、「迷惑の受身」のないこと、使役の受身「させられる」や「させていただく」のような表現のないことなどの違いが認められるのである。

第3章の「可能・自発表現」では、日本語では可能表現と自発表現との関係の深いことを述べているが、韓国語では自発表現に相応する表現のないことなどが明らかになった。

第4章の「否定表現」では、ムードと否定表現との関係などについて述べているが、韓国語の否定表現は語頭に否定のくる形式と語尾に否定の来る形式とがあるなど複雑な構造をなしており、日本語と対応させることが難しいのである。

第5章の「気」を含む表現では、日本語の表現の中でも「気」を含む語句の意味と用法を分析し、韓国語と対照している。「気」という字音語を含む表現の多いことは日本語、韓国語が中国語の影響を強く受けた典型的な例として注目されるのである。「気」が一語だけで使われる例は日本語の用法は多様であるが韓国語の例はほとんどないこと、日本語の「気」を含む表現の多くは、韓国語では「気」を含まない表現で訳さざるをえないことなどが明らかになった。

第6章の「評価副詞を用いた表現」では、現代の若い日本人の談話を対象として頻度の高い用法を中心にモデルを設定し、それを語彙の面、評価の条件、構文の条件、表現効果の方向などに基づいて記述し、韓国語と対照しようと試みている。それぞれの評価副詞を用いた表現が韓国語のどのような表現に当てはまるかについては、今後検討すべき点が多い。

第7章の「慣用表現」では、現代日本語の慣用表現を一般連語との関係、比喩表現との関係、擬音・擬態語との関

係などについて考察している。「慣用表現」については、韓国語についても同様な調査を行い対照してゆく必要があるが、今後の課題とされている。

第8章の「ジェンダー表現」では、代名詞、文末表現などについて日本語、韓国語の対照を試みている。また、敬語表現については、日本語では女性の方が、韓国語では男性の方が多様に用いていることを明らかにしている。

第9章の「おわりに」では、これまで述べてきたことをまとめるとともに、前章までは取り上げられなかった現代日本語の表現の様々な問題についてふれるとともに今後の課題について述べている。

論文審査の結果の要旨

日本語と西洋語とを対照して日本語の特徴とされることには韓国語と類似しているところが多い。そのようなことを考えると、日本語の諸表現を韓国語の表現と対照研究することは、日本語の表現の特色を明らかにするためにも重要なことである。本論文では、そのような観点から、現代日本語の表現の基本的な問題を取り上げ、韓国語の表現と対照することによって、その特色を明らかにすることを目的としたのである。

日本語では受身表現と使役表現とが明確に区別されるのに韓国語では受身の接尾辞が使役にも使われるために場面によって判断せざるをえないこと、「言われている」「考えられている」などの表現がテレビなどの報道の表現として韓国語の表現にも見られるようになってきていること、「気」を含む表現のように同じく中国語の影響を受けながら受け入れ方に違いの見られること、日本語・韓国語ともに敬語表現が多様であるが、日本語では女性、韓国語では男性の使用が特に目立つことなど重要な指摘も多い。ここで明らかにされたことには、現代日本語の表現の特色、現代韓国語の表現の特色を鮮明に浮かび上がらせているところが多いのである。

本論文は韓国の学生に日本語教育を行う中で問題となってきたところから出発し検討を深めていったところに特色があり、日本語と韓国語とでどのような点で共通しどのような点で相違するかを明らかにしたことは高く評価される。文法に限定せず表現の問題として考えていることも特色となる。表現分析をどのように体系化するかについてはなお課題が多く、本論文の各章が個別的な指摘を中心とするのは現段階として止むをえないとも言えよう。しかし、実際の例に基づいて述べるところが多く単に日本語教育の参考になるというにとどまらず現代日本語の特色を考えることに連なっているものである。本論文には残された課題もあるが高く評価される点も多い。以上によって本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。